



Title	女同士の絆の認識論：「女性のホモソーシャル ティ」概念の可能性
Author(s)	東, 園子
Citation	年報人間科学. 2006, 27, p. 71-85
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25873
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

女同志の絆の認識論 — 「女性のホモソーシャルリティ」概念の可能性 —

東 園子

〈要旨〉

本稿は、もっぱら男性に対してのみ用いられている「ホモソーシャルリティ」という用語を女性にも適用する意義を提示することを通して、「女性のホモソーシャルリティ」概念の確立を目指すものである。

イヴ・コソフスキー・セジウィックは、同性間の社会的絆であるホモソーシャル関係を、ホモセクシュアルとの類似と区別という観点から考察することで、近代欧米社会において男性の同性関係を「性的」／「非性的」で区分する認識枠組みを明らかにし、「非性的」な関係から社会を分析する有効性を示した。このような同性間の「非性的」な関係性を表す「ホモソーシャルリティ」概念を女性にも用いることで、女性間の「非性的」な絆が認識困難になっている現状を可視化し、女性や女性を取り結ぶ関係性に強固に結び付けられている「性的なもの」との関係問い直すことが可能になる。また、フェミニズムにおいては「シスターフッド」や「レスビアン連続体」という女同志の絆を表す用語が存在しているが、「女性のホモソーシャルリティ」は、分析概念としてこの両者とは異なる意義を有している。

「女性のホモソーシャルリティ」概念は、現在の強制的異性愛を伴う男性中心的社会を分析する際に有効だけでなく、そのような社会に枠付けられた女性の関係性のあり方を超えて、新しい女同志の関係を想像する端緒になると考える。

キーワード

女同志の絆、ホモソーシャルリティ、『男同志の絆』、強制的異性愛、「非性的なもの」

はじめに

イヴ・コゾフスキー・セジウィックが *Between Men* (1985 邦題『男同志の絆』) を発表してから二〇年が経過し、そこで用いられた「ホモソーシャル」という概念はジェンダー論に大きな影響を与え、元来の文学研究のみならず社会学の分野でも広く用いられるようになった。『男同志の絆』は男性の同性関係を対象にしているが、セジウィックは其中で「女性のホモソーシャル構造と男性のホモソーシャル構造との関係を論じた、よりよい分析が望まれる」(Sedgwick 1985=二〇〇一:二八)と述べ、自身が論じた男性のホモソーシャルティを女性のホモソーシャルティと関連づけるような議論への期待を見せている。しかしながら、男性のホモソーシャルティ研究が盛んに行われる一方で、女性のホモソーシャルティに関する研究や、ホモソーシャル概念を女性の同性関係に対して用いた研究は、現在でもそれほど進んでいないのではないだろうか。それは、単に女同志の関係に関心が向けられていないというよりは、そもそも「女性のホモソーシャルティ」という概念は成り立つのか、分析概念として意味のあるものなのかという疑問が持たれているからのようである。

そのため、本稿では以下のような議論を通して、「ホモソーシャル」や「ホモソーシャルティ」^①という概念を女性に使用すること、女性が置かれた状況や女同志の関係を考察に新しい視角が開

けることを示したいと考えている。まず、セジウィックの『男同志の絆』での議論に立ち返り、「ホモソーシャルティ」とはいかなる概念であるのかを確認した上で、それを分析概念として女性の同性関係に適用する意義を検討し、これまでフェミニズムにおいて用いられてきた女同志の絆を指す用語(「シスターフッド」・「レズビアン連続体」)と比較しながら、フェミニズムにとってどのような価値を持つ概念なのかを探ってみたい。「女性のホモソーシャルティ」概念は、女性に対して「非性的」な領域を切り開き、強制的異性愛のもとで女性と密接に結びつけられてきた「性的なもの」との関係性を解きほぐす端緒となる可能性を有すると考えられるのである。

1. 認識枠組みとしての「ホモソーシャルティ」

「ホモソーシャル」という語はセジウィックが作り出した言葉ではなく、『男同志の絆』以前から社会科学や歴史学の論文で使用されている。しかし、現在ではフェミニズム研究、クィア・スタディーズ等において、大抵ミソジニー(女性嫌悪)やホモフォビア(同性愛嫌悪)と共に言及されており、「ホモソーシャル」を用いる際はセジウィックの議論が前提となることがうかがえる。このように広範な影響力を持つセジウィックの「ホモソーシャル」概念がもたらした視角とは一体何だったのか、「ホモソーシャルティ」とはいかなる概念であるのかを、原点である『男同志の絆』に即して改めて考えてみたい。

「ホモソーシャル」とは、『男同士の絆』の冒頭部分で、「同性間の社会的絆を表す」(Sedgwick 1985=100:11)用語であると簡潔に述べられている。この男同士のホモソーシャルな絆を形成するのが、クロード・レヴィ・ストロースが『親族の基本構造』(1949)で論じたような「女性の交換」によってである。セジウィックが論じる、男同士のホモソーシャル関係によって支配され、男女間に権力格差のある社会(以下、「男性ホモソーシャル体制」と呼ぶ)は、男たちが「自分たちの絆を揺るぎないものにするために、女性を交換可能な対象として、価値のある貨幣として使用する」(Sedgwick 1985=100:118-119)ことで成り立っている。そのため、女性の立場には「表面上は男性の異性愛的欲望の対象、だが実際の機能は、男が他の男に向けるホモソーシャルな欲望の導管」(Sedgwick 1985=100:118)といった裂け目が存在するようになる。女性にとって、「男性のホモソーシャルな欲望が異性愛を経由することは、その欲望が達成されるか否かにほばかわらず、害となりうる」(Sedgwick 1985=100:176)として、セジウィックは女性の抑圧状況を、男たちの関係の間に置かれた状態として分析した。このような「女性の交換を土台とする社会では、強烈な男同士の絆がその中心にあるだけでなく、その事実が社会構造のあらゆる局面にとって決定的な意味を持つ」(Sedgwick 1985=100:131、強調セジウィック)のであるが、近代欧米社会において、その男性のホモソーシャルティを特徴づける要素がホモフォビアである。古代ギリシャのように男性ホモソーシャル体制にホモフォビアは必然ではな

いが、近代社会においては多大な影響力を持つ。その中でセジウィックの関心は、男性ホモソーシャル体制がいかにホモフォビアを生み出すかよりも、ホモフォビアが男性ホモソーシャル体制内でのどのような効果を持つかに向けられている。

このような『男同士の絆』は『親族の基本構造』のフェミニズム的読み直し②の一つとして位置づけられるが、先行研究とセジウィックの議論の違いとして、歴史的視点の導入と、個別の関係への注目があげられよう。これらは、セジウィックが近代イギリス文学とその変化を分析対象にしていることによると考えられる。『男同士の絆』は、文学作品に描かれた男同士の関係やそれに関わる男性個人の心理に焦点をあて、そこに働く力学を考察している。だからこそ、副題にもあるように、「欲望」という個人的なもの(むろん、それは政治的でもあるだろうが)が取り上げられているのである。このようなセジウィックの関心のあり方は、「ホモソーシャル」の「ソーシャル」という言葉をどう捉えるかにも関わってくるだろう。セジウィックの言う「ホモソーシャル」とは、「社会」という集団の存在を背景に置きつつも、個人が具体的に結び関係や他者への感情の性質を表す用語だと見なすことができる。

セジウィックは、「ホモソーシャル」という用語は、「ホモセクシュアル」との類似を、しかし「ホモセクシュアル」との区別をも意図して造られた」(Sedgwick 1985=100:11)言葉だと説明している。この、「ホモセクシュアル」との類似と区別」という問題は、単に「ホモソーシャル」という言葉の成り立ちにまつわるだけでな

く、『男同士の絆』全体を貫く視点でもある。上原早苗は、セジウィックのホモソーシャル論を用いた論考において、しばしばホモソーシャル概念の、ホモセクシュアルとの区別の部分にのみ目が向けられ、セジウィックが論じたホモセクシュアルとの類似性が忘れ去られる傾向があることを指摘している（上原二〇〇一）。このような両者の区別に重点を置く論者の一人として、上野千鶴子があげられるだろう。上原は、『ホモソーシャル』に「同性社会的」という訳語をあてることが、セジウィックの思想をホモソーシャルとホモセクシュアルの「二項対立の図式に還元することによって、その核心を捉え損なってしまう」（上原二〇〇一・九三）と述べているが、上野は「暫定的」に「ホモソーシャル」を「同質社会的」と訳しており（上野一九九八・二四四）、「ホモソーシャルリティ」は「異質排除のマッチョ志向」であると述べている（上野一九九八・二四五）。しかしながら、はたしてホモソーシャルリティとホモセクシュアリティの区分は、同質性／異質性の問題なのだろうか。『男同士の絆』において、「ホモソーシャル」と「ホモセクシュアル」は一体何を区別するものなのかを、両者の類似性をめぐるセジウィックの議論から考察してみたい。

セジウィックは『男同士の絆』の議論を、自身の立てた「ホモソーシャルとホモセクシュアルとが潜在的に切れ目のない連続体を形成しているという仮説」（Sedgwick 1985=二〇〇一・二）に基づいて進めている。この「連続体」の用い方はアドリエヌ・リッチの「レズビアン連続体」（後述）の影響を受けたもので、セジウィックは、

ホモソーシャル関係にホモセクシュアル関係も含めた男同士の関係の総体を、「男性のホモソーシャル連続体」と呼んでいる。実際の社会を見てみても、「最も肯定されてしかるべき男性のホモソーシャルな絆と、逆に最も非難されてしかるべき同性愛とを比べると、両者には往々にして重大な類似や一致が認められる」（Sedgwick 1985=二〇〇一・一三六）。この事実が、男性のホモソーシャルな欲望を「女性に迂回させることを義務とする世界」から、「真ん中の項の女性を単純に省いたらどうなるか」という「魅力的かつ危険な選択肢」が現れる時代には、特に重大な問題となる（Sedgwick 1985=二〇〇一・二二五）。女性という項を省く、つまり、女性を媒介にせず直接的に男同士の絆を結ぶという選択肢が浮上した背景には、レヴィンストロースが対象にしたような親族中心の社会が、「全てをアトム化する初期資本主義の力のもとで、家族そのものの支配権が弱体化し、家族が生産労働をも担いうる私的な基盤ではもはやなくな」（Sedgwick 1985=二〇〇一・二二五）ったため、「女性の交換」という意味での結婚の利点が減少したことがあるだろう。このような変化に伴い、「セクシュアリティやホモソーシャルな絆に対するもっと緊密に組織化された、もっとあからさまに禁止的な態度が現れ始める」（Sedgwick 1985=二〇〇一・二二五）。それがホモフォビアである。

一九世紀から二〇世紀以降の欧米社会では、強烈なホモフォビアの働きで男同士の関係性が二分されることになる。男性ホモソーシャル体制にホモフォビアが伴うのは、男同士のホモソーシャルリティが

らホモセクシュアリティを分離しようとする社会においてである。しかしながら、両者の間には「不可視の、注意深くばかされた、つねにすでに引かれた境界線しかない」(Sedgwick 1983=1001:137) ために、男性が他の男性に抱く感情や彼との絆が同性愛的ではないという確信を持つことが難しい。そのため、男性は自分が同性愛者と見なされホモフォビアによる迫害を受ける可能性に脅かされて、それを避けるべく同性愛者と思われたいよう行動するので、男性の広範囲にわたる行為や人間関係が統制されていく。こうして、「男性のホモソーシャル連続体」が「一層露骨にホモフォビアという侵略性をおびた力で切断され」ることによって、「異性愛を強制する状況が生まれ」るのである (Sedgwick 1985=1001:104)。

このように、ホモフォビアが社会全体を管理する道具となるのは、それが「男性のホモソーシャルな欲望の規範的・記述的な境界線を画定する力」(Sedgwick 1985=1001:134) を持っているからである。何が排斥されるべき「ホモセクシュアル」であり、どのようなものであれば「ホモソーシャル」として肯定されるのか、それは結局、ホモフォビアの対象となったかどうかでしか判断できない。ホモフォビアとは、「ホモセクシュアル」とは何か、「ホモソーシャル」とは何かを定めることを通して、「男性の絆の境界線を画定し、統制し、操る(おそらく必然的に恣意的な) 弁別法」(Sedgwick 1983=1001:131、強調引用者) なのである。このようなセジウィックの議論に依拠すると、ホモソーシャルリティとホモセクシュアリティの区別は、明確な実質的差異に基づくというよりも、関係

性や感情の認識・解釈の仕方によるということになる。つまり、セジウィックが論じたのは、ホモソーシャルリティ/ホモセクシュアリティの内実ではなく、認識枠組みの問題である。

そして、ここでのホモセクシュアル(同性愛的)であるとは、同性間の関係や同性に向けられた感情が「性的」であるということである。つまり、ホモソーシャルとホモセクシュアルの境界線を引くこととは、何が「性的」であるのかを定めることなのである。セジウィックが問題にしているのは、「「性的」であるとは歴史的に何を指すか」(Sedgwick 1985=1001:1) であり、彼女のねらいの一つは、「セクシュアリティの姿とセクシュアリティとみなされているものが、いかに歴史的な権力関係から影響を被ると同時にそれに影響を及ぼすかを探求すること」(Sedgwick 1985=1001:13、強調セジウィック) にある。もちろん、このような視点に立った研究は、ミシェル・フーコー以降さまざまな研究者によって行われている。では、それらと違ったセジウィックの斬新さはどこにあるのだろうか。セジウィックは、「性器接触を伴わない絆や権力のあり方が変化するにつれて、「性的なもの」を性器的なものに結びつける絆の強さやかたちすらも変化し、そしてその絆の性質が、今度は権力の配分法に影響を及ぼす」(Sedgwick 1983=1001:74) と述べている。つまり、セジウィックは「ホモセクシュアル」という「性的なもの(the sexual)」に、「ホモソーシャル」という「非性的なもの(the nonsexual) (と見なされているもの)」を対置させ、後者の方に着目しているのである。従来の論考が「性的なも

のと非性的なものとの境界線」(Sedgwick 1985=二〇〇一:三三)を「性的なもの」から捉えようとする傾向があるとすれば、それを「非性的なもの」から考察しているのがセジウィックの議論だと考えられよう。『男同士の絆』は、「非性的なもの」から強制的異性愛やそれを基盤とする社会を分析することの有効性を示していると言えるのではないだろうか。このように、『男同士の絆』は、(男性の)同性関係をどう捉えるかをめぐる「ホモセクシュアリティ／ホモソーシャル」の認識論であり、それは他者に対する感情や関係性における「性的なもの」／「非性的なもの」の認識論でもあるのだ。

『男同士の絆』は、一八世紀から一九世紀のイギリスにおいて、男同士の関係や男性が他の男性に向ける感情を認識する際に使用される図式を明らかにした。しかし、それと同時に、近代イギリス社会に限らず、私たちが同性関係について考える際に非常に有用な分析概念をも『男同士の絆』は提供していると言える。もちろん、「ホモセクシュアル」との類似と区別^①が元になっている「ホモソーシャル」という関係性の把握の仕方は、他者を同性と異性に、「性的」な感情・関係性を同性に対するものと異性に対するもの^②に、また、同性との絆を「性的」なものとそれ以外に分類する「ホモセクシュアル」概念の確立以降にしか成立しえないと言える。しかしながら、「ホモセクシュアル」概念の誕生以前であっても、当時の人々の認識とは異なることを念頭に置いた上で、「これは(現在で言うところの)ホモソーシャルにあたる」と指摘することは可能で

あろう。物事の認識枠組みは、特定の時代の特定の社会に生きる人々が日常生活の中で自己や他者を認識する際に用いるものと、分析者が自分の生きる時代や社会を超え一定の基準にそって物事を認識するためのものがある(この両者は厳密に切り離せるものではないが、概念的には分離可能であろう)。セジウィックのホモソーシャル論は、この両方の意味において、有効な認識枠組みを提示していると言えるのではないだろうか。

2. 「女性のホモソーシャル」概念の有効性

(1) 「不在」の可視化

冒頭で述べたように、現在「男性のホモソーシャル」概念が広く共有されているのに比べ、「女性のホモソーシャル」という概念はいまだ確立していないようである。その理由としては、まず、セジウィックが対象にしたのが男性のホモソーシャルであり、女性のホモソーシャルにはほとんど言及していない^③ことが考えられる。そのことが、「ホモソーシャルⅡ男同士の関係」という印象を与えているようだ。セジウィック自身は「ホモソーシャル」を使う際に「男性の(male)」といった形容詞をつけているが、一般的には、「ホモソーシャル」という用語は何も注釈がなくても男性のそれを指すものとして用いられている場合が多いようである。そして、『男同士の絆』以降、「ホモソーシャル」を使用する際にはセジウィックの議論が暗黙の前提となっているため、セジウィック

が分析した一九世紀のイギリスというある特定の社会における男性のホモソーシャル関係のあり方自体を、「ホモソーシャリティ」一般と見なす傾向もあるように思われる。このような見方においては、ホモソーシャリティには必ずミソジニーとホモフォビアが伴うのであり、ホモソーシャリティは女性や同性愛を抑圧する男性中心社会の原理そのものともなる（先にあげた上野の見解にもこの傾向が見受けられる）。したがって、「ホモソーシャリティ」をこのように捉える立場からすると、「女性のホモソーシャリティ」というものはありえないばかりか、そのような概念を確立しようとすることは、「男性のホモソーシャリティ」がそうであるような女性・同性愛差別の原理をまた新たに生み出すことにもなりかねないことになる。

だが、先に記したように、「ホモソーシャル」という言葉自体は「同性間の社会的絆」以上の何か、例えば対象となる性別や特定の性質を指示するものではない。「女性のホモソーシャリティ」は、ホモソーシャリティの語義からすると言葉としては成立可能である。したがって、問われるべきは認識枠組みとしての有効性ということになる。大橋洋一は、「ホモソーシャル」とは、社会における同性どうしの人間関係のことで、男性関係、女性関係のどちらをも意味しうる」が、「（これはコゾフスキーが批判されているところでもあるが、同時に、評価すべきところでもあるのだが）分析の道具としての「ホモソーシャル」概念は、男性同士の関係に限られる」と述べ（大橋 一九九五：一四一）、「ホモソーシャル」概念を男性の同性関係に用いる場合のみ意味を持つものとして捉えている。それ

は、ホモソーシャルが「父権制社会の中心的維持装置」（大橋 一九九五：一四一）となるのは男性の場合に限られるからのようだ。同様に、竹村和子は、女同士の絆は「社会の裏づけが欠落している」ために、「女にとって、セジウィックが言う意味でのホモソーシャルは論理的にはありえない」と述べている（竹村 一九九三：〇九）。しかし、「ホモソーシャル」の「ソーシャル」という語から、社会制度という含意を抜き去り、「今、共にいること」という本来の意味だけを取り出せば」（竹村 一九九三：〇一三—〇一四）女性にも適用可能であるとして、女の「ホモソーシャルな欲望」を、「政治的同盟という解釈をこえるもの、さらには異性愛にも同性愛にも分類できず、同性愛の偽装とも解釈できない」（竹村 一九九三：〇九）ものだと説明している。大橋も竹村も、分析概念として使用可能かどうかについては意見が分かれるものの、女性のホモソーシャリティには、男性のホモソーシャリティが持つ男性中心社会を維持するための社会的装置という性質が欠如していることを指摘している。女性のホモソーシャリティと男性のホモソーシャリティは非対称であるのだ。

セジウィックは『男同士の絆』の議論を、ジェンダー間でホモソーシャリティとホモセクシュアリティの連続性について違いが見られることに対する疑問から始めている。そして、このような差異の存在自体が、「男女間に長きにわたる権力の不平等があることを示すものであり、またそのメカニズムでもあな」（Sedgwick 1985：二〇〇—二〇一）と述べている。女性に対して「ホモソーシャル」という

概念を男性と同じように用いることができないように見えるならば、それこそがジェンダー間の不平等の表れであり、分析すべき事象なのではないだろうか。セジウィックは議論の対象を男性のホモソーシャル関係に絞ったために、女性の問題は男性の異性愛関係の相手という文脈でしか取り上げず、女性の同性関係についてはほとんど考察していない。セジウィックが論じた男性ホモソーシャル体制の中に女性のホモソーシャルリティを位置づけることは、セジウィックのホモソーシャル理論をさらに精緻化するために不可欠な作業である。社会における女性のホモソーシャルリティの様態や男性のそれとの相違の考察は、『男同士の絆』で分析された男性中心社会を別の角度から見るとなる。それによって、社会分析に「女性のホモソーシャルリティ」概念を用いることは、ジェンダー間の不平等や強制的異性愛の女性への影響を見るための切り口の一つとなる。

しかしながら、「男性のホモソーシャルリティ」に比して「女性のホモソーシャルリティ」という概念が通用していないのは、現在の社会において、「女性のホモソーシャルリティ」にあたる事象が存在していない（ように見える）ことを反映しているのかもしれない。竹村は、女の「ホモソーシャルな欲望」について、「男の「ホモソーシャルな欲望」と異なって、制度によって裏づけられることがなく、制度の隙間——男／女、異性愛／同性愛、精神／身体という階層秩序の隙間——に出現する、あくまで個別的で私的な「出来事」（竹村一九九三一一）であると述べている。女性のホモソーシャル

ティは、現在の「制度」に織り込まれていないのだ。それゆえ、女性の「ホモソーシャルな欲望」は、従来使われてきた性差別的、異性愛主義的、精神／身体の二分法的な言語では「分節化できないゆえに、制度にとってはもともと「語りえぬもの」であり、「女たちにとってさえ、内部抑圧を避けて保持しつづけることが（すくなくとも現在では）むつかしい経験」でもある（竹村一九九三一一）。つまり、女性のホモソーシャルリティは、三重の意味で認識不可能な存在だと言えよう。一点目は、ミソジニーとホモフォビアを伴う現在の男性ホモソーシャル体制を構成する要素ではないものとして、二点目は、現行の社会で使用されている言語では捉えきれないものとして、三点目は、女性たちが持続的に経験として把握することが困難なものとしてである。女性のホモソーシャルリティは、社会制度の中にも、言語の中にも、多くの女性の経験の中にも不在なのである。これは、女性がホモソーシャルと呼べるような関係を他の女性と取り結んでこなかったというよりは、社会の中でも女性当人においてもそれを認識できていないことを意味する。しかし、認識枠組みの範疇にない関係性を意識的に育むことは困難であろう。このような女性のホモソーシャルリティの「不在」こそが、男性ホモソーシャル体制が女性に与える抑圧に他ならないのではないだろうか。

『男同士の絆』以降、男性のホモソーシャルリティに関する研究が一気に出現したことは、セジウィックが男同士の絆に「ホモソーシャル」という名称を与えたことによってそれが把握可能になったことを示していると言えよう。「語りえぬもの」について語るには、そ

れを表す言葉がなくてはならない。それができて初めて、今までそれについて語られていなかったことが明らかにになるだろう。「女性のホモソーシャリティ」概念は、このような「不在」を可視化するための装置となりうる。「女性のホモソーシャリティ」概念によって今まで認識されていなかったものを認識可能にすることで、女性に関する新しい見識が生み出される余地が開けるのではないだろうか。

(2) 「非性的」な関係性

ここで「女性のホモソーシャリティ」という、ホモセクシュアリティと対置される概念を打ち出そうとすることは、二項対立的な認識の弊害が多く指摘される中で、新たな二元論的枠組みを作り出す必要性が問われることになる。また、セジウィックの述べるように、「現代社会では、女性のホモソーシャルな絆とホモセクシュアルな絆との間に比較的連続性があるのに対して、男性のホモソーシャルな絆とホモセクシュアルな絆とは完全に断絶して」(Sedgwick 1985: 二〇〇一六) いるのであれば、男性の場合はホモセクシュアリティと明確に分離された形でホモソーシャリティが存在している現状があるのに対し、ホモセクシュアリティと未分化な状態にある女性のホモソーシャリティをわざわざ言い立てる必要があるのかという疑問も浮かんでこよう。そこで、女性に対して「ホモソーシャリティ／ホモセクシュアリティ」という認識枠組みを採用する意義について考えてみたい。

前節では、ホモソーシャル理論におけるホモソーシャリティとホモセクシュアリティの区別に重点を置く論者の存在に触れたが、逆に両者の類似を重視する論者もいる。大橋は、ホモソーシャリティを異性愛の「内部にある同性愛」(大橋二〇〇二: 一七)と捉えており、ホモソーシャリティを「同性愛」と同一視している。それが可能になるのは、大橋が「同性にさまざまな好ましい関心をよせる広義の同性愛」(大橋二〇〇二: 一三)を設定しているからである。おそらく、ホモセクシュアリティが「狭義の同性愛」、ホモソーシャリティが「広義の同性愛」になっていると考えられ、セジウィックが「ホモソーシャル連続体」と名づけたような男同士の関係性の総体を、大橋は「同性愛」と呼んでいる¹⁾。それでは、なぜホモソーシャリティを、一般的には「性的なもの」を表す言葉である「同性愛」を用いて語ろうとするのだろうか。それは、大橋が「すべてが同性愛という視点から説明できるようなパラダイムに同性愛を発熱転換させることをめざしている」(大橋二〇〇二: 一七)からのようだ。大橋にとって、セジウィックもその一角を担うクィア理論の持つ「クィア的視点」とは、異性愛「内部の同性愛を暴く」ものであり、クィアとは「異性愛と同性愛の区分を攪乱するハイブリッドな存在」である(大橋二〇〇二: 一七)。ホモソーシャリティを「同性愛」と呼ぶことで、異性愛者とは無関係であるかのように成立させられている「同性愛は同性愛者だけのものではない」(大橋二〇〇二: 一三)ことを導き出し、「異性愛と同性愛の区分を攪乱」しようとしているのである。

この大橋の戦略は、男性を対象に想定しているからこそ通用するものであると言えるだろう。なぜなら、大橋の言う「異性愛内部の同性愛」(『ホモソーシャルリティ』)が制度的に確立しているのは男性だけであるからだ。男性は、ホモソーシャルリティとヘテロセクシュアリティによって男性ホモソーシャル体制に関わる。そのため、社会制度にとって男性は「ソーシャルな存在」かつ「セクシュアルな存在」であるが、近代以降の社会においては、「セクシュアルな存在」であるのは私的領域においてのみだとされている。そこから、公的領域の「ソーシャルな存在」である男性が、実は「セクシュアルな存在」でもあると主張する意義も出てこよう。しかしながら、女性にはヘテロセクシュアリティを通してのみ男性ホモソーシャル体制に関わる。したがって、社会制度にとって女性には「セクシュアルな存在」でしかなく、そこから「性的なもの」と強固に結びつけられることになる。これまでフェミニズム研究が明らかにしてきたように、女性とは「性的なもの」そのものであると見なされることも往々にしてあったのだ。このような女性に対しては、ホモソーシャルリティとホモセクシュアリティを「同性愛」の名のもとで一括しても、攪乱的效果は低いと考えられる。

男性のホモソーシャルリティを「(広義の)同性愛」と見なす大橋の意図は、「『ホモソーシャル』なものを今一度『欲望』という潜在的に官能的なものの軌道に乗せてや」(Sedgwick 1985=二〇〇一:二)ろうとするセジュウィックのねらいと重なっており、現在のホモフォビックな状況を変革しようとするものだと言えるだろう。しか

しながら、大橋のようにホモソーシャルリティをただ「同性愛という視点から説明」しようとすることは、フーコーが論じたような、「性」をすべての理由」(Foucault 1976=一九八六:一〇三)であるとしてセクシュアリティの「最大飽和状態の場をしつらえる」(Foucault 1976=一九八六:六一)近代の権力を補強する危険性を秘めていないだろうか。ましてや、女性の同性関係すべてを、大橋が男性に対して行ったように「同性愛」に一元化して取り扱えば、「隅から隅まで性的欲望の充満した身体として分析され、つまり評価され貶められた」(Foucault 1976=一九八六:一三四)女性のあり方を一層強化することになりかねない。同性関係に限ったことではないが、女性に関してはその状況を「非性的」な視角から捉えることを可能にするような認識枠組みが必要なのではないだろうか。

現在、女性の間の個別的で強固な関係性を表す語は、「レズビアン」という「性的」とされている言葉しか日常的には用意されていない。もちろん、「友情」や「親友」といった言葉も女性に用いることができるが、男性のホモソーシャル関係を中心とする現代の社会において「男の友情」は美しく尊いものとされるのに対し、「女の友情」に「男の友情」のような強い絆が想定されているとは思えない。「女の友情」のイメージは、異性愛関係の片手間に結ばれる弱い絆といったところではないだろうか。それは、強制的異性愛を伴う男性ホモソーシャル体制においては「セクシュアルな存在」ではない女性にとって、他の女性は男性の愛を争う競争相手ではないかありえないはずだという観念があるからだろう。そのため、一般的

な「女の友情」を超えるような緊密な関係を他の女性と結んでいる女性が、自分は「精神的なレズビアン」ではないかと考えることがあるところ（『AERA』一五（五三）：三三）。自分と他の女性の関係や彼女に対する感情を「精神的」、すなわち「非性的」であると自認する女性であっても、関係の濃密さを表そうとすれば、「レズビアン」という「性的」な枠組みを用いざるをえない。現代社会においては、相手が同性だろうが異性だろうが、女性を取り結ぶ親密な関係はセクシュアリティに関わる語句で表すしかない。女性の関係性・親密性については、社会的には「性的なもの」が優越性を持ち、高い価値が与えられているのである。「女性のホモソーシャリティ」が「不在」であるように見える現状は、「性的なもの」と結びついていない強い絆を女性を持つことができないということでもある。「女性のホモソーシャリティ」について考えることは、「性的」であることに限られない女性の関係性のあり方を想像するための第一歩であり、女性や、女性の親密性、女性を取り結ぶ関係性に貼りついている「性的なもの」との関係を変える可能性を持っていると考えられるのではないだろうか。

3. 「女性のホモソーシャリティ」のフェミニズム的意義

これまで「女性のホモソーシャリティ」という概念によって女性の同性関係を考察することを提唱してきたが、もちろん、女同士の関係は以前からフェミニズムの重要な対象であり続けてきており、

「シスターフッド」や「レズビアン連続体」など、女同士の絆を指すよく知られた用語も存在している。したがって、ここでは、女同士の関係性を表すのに、この両者ではなく「女性のホモソーシャリティ」を使う意義はどこにあるのかを検討し、「女性のホモソーシャリティ」概念がフェミニズムにとってどのような意味を持ちうるのかを考察してみたい。

「シスターフッド」は、女同士の連帯や緊密な結びつきを示すフェミニズム用語である。家父長制下に置かれている女性たちがそれに対抗して獲得すべき絆として、この概念は一九六〇年代からの第二波フェミニズム運動の推進に大きな役割を果たした。しかしながら、社会関係の分析に「シスターフッド」を用いると、この概念の有する理念的・規範的な性格に当てはまらないような関係性を扱いにくいのではないだろうか。社会から切り離されたところで結ばれる関係は存在しない以上、女同士の関係のあり方も性差別主義や強制的異性愛の影響を受けていると考えられる。また、男女を問わず同性関係は必ずしも「良きもの」として存在しているのではなく、例えば権力関係を伴うような場合も珍しくない。しかし、女同士の緊密な関係性をすべて「シスターフッド」で表すと、対象によってはその関係の性質がこの言葉の持つ語感にそぐわず、さらには対等な絆であるかのような印象を与えてそこに内在する問題を隠蔽する効果を持つ恐れもある。逆に、「ホモソーシャリティ」に対しては、『男同士の絆』で議論されたのが抑圧的な社会を支える関係性であったため、否定的な印象が持たれていることも多い。だが、「ホモソー

シャル」という言葉自体は、本来「良い」関係性を指すものでも「悪い」関係性を指すものでもないで、それぞれの社会における女性の同性関係の性質や位置づけを見るのにより適した概念なのではないだろうか。

次に、「レズビアン連続体」について考えてみたい。これは、リッチが「強制的異性愛とレズビアン存在」(1980)の中で提唱した概念で、当時のフェミニズムにおいてレズビアンの存在が無視されていたことに対して、分断された兩者をつなこうとする意図が込められている。「レズビアン連続体」とは、単に「女性が他の女性との生殖器的性経験をもち、もしくは意識的にそういう欲望をいだくという事実」だけでなく、異性愛者と自認する女性も含めた「女同志のもっと多くのかたちの一次的な強い結びつきを包み込んで、ゆたかな内面生活の共有、男の専制に対抗する絆、実践的で政治的な支持の与えあいを包摂し」たものである(Rich 1986=一九八九:八七)。この言葉は、セジウィックの「ホモソーシャル連続体」という用語の元になっている通り、女性のホモセクシュアル関係とホモソーシャル関係の総体を捉えようとするものだと言えるだろう。リッチは「レズビアン」という概念を「性的なもの」から拡大し、他の同性関係と連続したものにしようとする意図を持っている。だが、「レズビアン連続体」に対しては、レズビアンを脱性化するものだという批判がなされている。リッチは「一次的なエロスと情動の相手に女性を選択した女たち」(Rich 1986=一九八九:一一七)を「レズビアン存在」と呼び、その問題は全ての女性に関わることを強調した

上で、「「レズビアン存在」と「レズビアン連続体」^{コンティヌウム}とのあいだには、ちがいがあ

る」(Rich 1986=一九八九:一〇七)と述べているが、「レズビアン連続体」という概念は、そのような「ちがいを曖昧にするものと見なされているのである。女性のホモソーシャルリティが「不在」である現状において、明確に区分できないものではあるものの、女性の「性的」な同性関係と「非性的」な同性関係を一括し、一般的には「性的」と見なされている「レズビアン」という言葉のもとで提示すると、その内に連続していながら性質を異にする二種類の同性関係が含まれていることが見えにくくなっているのではないだろうか。リッチの枠組みから抜け落ちているのは、女性が結ぶ「一次的なエロスと情動の相手」以外との同性関係を指す用語である。その両者が揃って初めて、女性のホモセクシュアリティとホモソーシャルリティの「連続体」に目を向けさせることができるだろう。

もちろん、「女性のホモセクシュアリティ」と区別される形で「女性のホモソーシャルリティ」概念を打ち立てることは、「女性のホモセクシュアリティ」に「性的なもの」を一方的に負わせ、リッチの批判するような、「女同志の友情や結びつき」が「エロティックなものから切り離され、そうすることでエロティックなものをそれ自体を限定してしまう」恐れがある(Rich 1986=一九八九:八九)。また、近代社会におけるホモフォビアとは(男性の)ホモソーシャルリティとホモセクシュアリティを分離しようとするものであったため、「女性のホモソーシャルリティ」概念が女性のホモセクシュアリティ

に対する差別意識を助長する可能性がないとは言えない。このような事態を避けるためには、ホモソーシャリティは「ホモセクシュアリティとの類似と区別」を併せ持つことを示し、ホモセクシュアリティとの連続性を強調することが不可欠である。また、リッチのように「レズビアン」のイメージを単に「性的」なだけではないものにしていくとする、レズビアン・スタディーズにおける取り組みと連携する必要があるだろう。この両面が揃うことで、性的指向に関わらず、女性と「性的なもの」の強固なつながりを解きほぐすことに近づくことができると考えられる。

また、「女性のホモソーシャリティ」を通して女性の「非性的」な側面を探ろうとすることは、女性の性的欲望を認め、女性の性的主体性を確立しようとする動きと対立するように見えるかもしれない。しかし、女性の「非性的なもの」を考察することは、女性の性的能動的な主張が、女性のイメージを受動的な「性的なもの」から能動的な「性的なもの」に変え、引き続き女性を性的に搾取しようとすることに利用されるだけにならないようにする役目を果たしうる。女性の新たな性的可能性の探求と、女性の「非性的」な可能性の探求は、どちらか片方ではなく、共に行われるべきだと考える。

ジェンダーやセクシュアリティに関する研究の進展によって、強制的異性愛こそが、性的指向による差別のみならず、二元的かつ固定的なジェンダーや男女間の不平等を生むという見解が普及してきた。それに伴い、レズビアン・スタディーズ、ゲイ・スタディーズ、またクイア・スタディーズなど、強制的異性愛から排斥されたもの

から強制的異性愛を捉え返そうという動きが広まっている。女性のホモソーシャリティもまた、強制的異性愛によって排除されてきたものではないだろうか。女性のホモソーシャリティという視点から強制的異性愛を見ることは、この社会に対する新たな知見をもたらしうるだろう。また、これまでレズビアン・フェミニズムのように、強制的異性愛を非異性愛によって乗り越えようとする試みもなされてきた。ホモソーシャリティが強制的異性愛と一体化している男性とは違って、女性の場合は、ホモソーシャリティによって乗り越える道もまた存在していると考えられる。ホモソーシャリティはホモセクシュアリティと明確に区分できないという留保をつけた上で、「女性のホモソーシャリティ」概念を確立することは有意義なものではないだろうか。それは、セジュウィックやリッチが目指した、フェミニズムとアンチ・ホモフォビアという二つの立場を連帯させる可能性をも秘めているかもしれないのである。

おわりに

本稿では、まず、「ホモソーシャリティ」概念は同性関係に対する認識枠組みであり、「性的なもの」／「非性的なもの」をめぐる問題を浮かび上がらせることを確認した。次に、そのような「ホモソーシャリティ」概念を女性にも適用することで、男性ホモソーシャル体制における女性のホモソーシャリティの「不在」を可視化し、女性の関係性において「非性的」な領域を開く役割を果たしうるこ

とを示した。そして、強制的異性愛の女性への影響を新たな角度から捉え、それに抗していくために、「女性のホモソーシャルティ」

概念は有効なのではないかという主張を述べた。

女性のホモソーシャルティは、現在の男性ホモソーシャル体制の構成要素から抜け落ちているものである。竹村は女性の「ホモソーシャルな欲望」を、「制度」にとって「もっとも危険なもの」(竹村一九九三一一)と表現した。男性中心社会にとって「危険」なのは、フェミニズムにとっては利用する価値のあるものでもある。「女性のホモソーシャルティ」概念は、男性中心社会の在りようを分析する上でも、男性中心社会に揺さぶりをかける上でも、大きな可能性を持つ概念なのではないだろうか。

註

(1) 本稿では、「ホモソーシャル」と「ホモソーシャルティ」を区別せず、文脈に応じて適宜使用する。他の議論を参照している部分以外は、「ホモソーシャルティ」を「ホモソーシャル」の名詞形として用いる。

(2) デイル・ルービン「女の交易」(1975)、リウス・イリガラ「商品たちの間の商品」(1975)・「女の市場」(1976)等。

(3) 『男同士の絆』における女性のホモソーシャルティへの言及は、序章と第八章にわずかに見られる程度である。

(4) そのため、大橋は「ホモセクシュアル連続体」という言葉を持ち出した上で、セジウィックの用法ならばホモセクシュアル関係を含むはずの「ホモソーシャル連続体」を、ホモセクシュアリティを排除した、「ホモセクシュアル連続体」と対立するものとして扱っている。

参考文献

- Foucault, Michel, *La volonté de savoir (Volume 1 de Histoire de la sexualité)*, Editions Gallimard, 1976 (渡辺守章訳『性の歴史1 知への意志』新潮社、一九八六年)
- 大橋洋一「ホモフォビアの風景——ホモソーシャル批評とクイアー理論の現在——」『文学』第六卷一号、一九九五年、一三八—一四五。
- 「クイアーに視れば、それがなにをもたらしたのか」『大航海』第四三号、二〇〇二年、一〇二—一〇九。
- Rich, Adrienne, "Compulsory Heterosexuality and Lesbian Existence," *Blood, Bread, and Poetry: Selected Prose 1970-1985*, W.W.Norton&Company, Inc, 1986 (大島かおり訳「強制的異性愛とレズビアン存在」『アドリエンヌ・リッチ女性論 血、パン、詩』晶文社、一九八九年)
- Sedgwick, Eve Kosofsky, *Between Men: English Literature and Male Homosexual Desire*, Columbia University Press, 1985 (上原早苗・亀澤美由紀訳『男同士の絆 イギリス文学とホモソーシャルな欲望』名古屋大学出版会、二〇〇一年)
- *Epistemology of the Closet*, The University of California Press, 1990 (外岡尚美訳『クローゼットの認識論 セクシュアリティの20世紀』青土社、一九九九年)
- 竹村和子「〈悪魔のような女〉の政治学 女の「ホモソーシャルな欲望」のまなざし」海老根静江・竹村和子編『女というイデオロギー アメリカ文学を検証する』一九九九年、二九五—三二一。
- 上原早苗「ホモソーシャルティとホモセクシュアリティ」『大航海』三九号、二〇〇一年、八八—九三。
- 上野千鶴子「発情装置 エロスのシナリオ」筑摩書房、一九九八年。
- 「自立系女が陥る「共依存」」『AERA』朝日新聞社、第一五卷五三号、二〇〇二年、二二—二五。

Epistemology of the Bonds between Women : The Possibility of the Concept of "Female Homosociality"

AZUMA, Sonoko

This paper aims to establish the concept of “female homosociality”, by indicating the significance of applying the term of “homosociality” which is mostly used for men, to women.

By considering the male homosocial relationship that is a social bond between persons of the same sex from a point of view that likened it to and distinguished it from homosexuality, Eve Kosofsky Sedgwick made apparent the cognitive framework of relations between persons of the same sex, whether “sexual” or “nonsexual”, in modern western society, and showed that it is valid to analyze society by “the nonsexual”. To apply “homosociality” indicating a “nonsexual” relationship between persons of the same sex can make the difficulty of perceiving “nonsexual” relationship between women visible, and put the strong connection between women and “the sexual” in question. And though there are terms showing bonds of women in feminism, “sisterhood” and “lesbian continuum”, “female homosociality” has a different significance as analytic concept.

The concept of “female homosociality” can be not only effective to analyze male dominant societies with compulsory heterosexuality, but also a clue making it possible to imagine new bonds between women beyond the relationships of women restricted by such societies.

Key words : the bonds between women, homosociality, *Between Men*, compulsory heterosexuality, “the nonsexual”